

ESD レポート

Education for Sustainable Development

ESD とは「持続可能な開発のための教育 = Education for Sustainable Development」の略。社会、環境、経済、文化の視点から、人類が直面するさまざまな課題に取り組み、公正で豊かな未来をつくる「持続可能な開発」—— それを実現する力を、世界各地に生きる私たち一人ひとりが学び育むことを目指して、「国連持続可能な開発のための教育の10年（ESDの10年）」が、2005年からスタートしています。

目次

特集 ESD の10年キックオフ!

- 成果と課題…………… 2
- 参加者の感想…………… 3
- 紙飛行機メッセージ…………… 4
- 報道記事…………… 4
- 「ESDとよなか」キックオフ…………… 5
- 海外でのキックオフ…………… 6

ESD とつながろう

- 愛知万博シンポジウム報告…………… 7
- ESDに期待します!…………… 7
- 私がESD-Jに入ったわけ…………… 7

ESD を知ろう

- ESD 基本用語集…………… 9
- ESD 関連の本…………… 9
- ESD-J2005 活動方針…………… 10
- 地域の動き…………… 10
- 国際的な動き…………… 11
- ESD-J だより…………… 12

2005年6月1日発行

NPO 法人

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議



特集

ESDの10年 キックオフ!

2005年は、ESD（持続可能な開発のための教育）元年。国連決議のもと、これからの10年間、ESDという名の教育運動が世界各国で取られます。その先頭を切って、日本での開始式（キックオフミーティング）が行われました。

☞ キックオフセレモニーにて、参加者それぞれの思いを折り紙に書き込み、紙飛行機でいっせいに飛ばしました。



「ESDの10年日本キックオフミーティング」の成果と課題

ESDの10年日本キックオフミーティング実行委員長 降旗 信一

■ キックオフミーティングのねらい

2005年3月6日(日)午後、東京で、『国連持続可能な開発のための教育の10年』キックオフミーティング 未来へのまなびをはじめよう』が開催されました。

「キックオフ」とは、サッカーの試合などで使うように「試合開始!」の意味です。2002年のヨハネスブルクサミットで小泉首相が「日本のNGOと共に」提案し、その年の国連総会で決議された「国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」がいよいよ今年、2005年より始まりました。この10年の開始にあたり、NPOやNGO、国際機関、政府、産業界、地域、国会議員そして市民など、持続可能な社会づくりにかわるさまざまな立場の人びとが一堂に集い、この「ESDの10年」にどのような期待をし、なにを実現したいと思っているかを語り合い、この10年をとおしてよりよい未来を創るための教育や学びの活動の環を広げていく。そんな意思と戦略をあらためて共有する場として、このミーティングは企画されました。

■ さまざまな立場、分野の方が一つのテーブルに

このミーティングに先立つ3月1日には、ニューヨークの国連本部でも国連や各国政府機関などの関係者の出席のもと、国際的な「キックオフミーティング」が開催されたのをはじめ、ニュージーランドなど世界各国でも同様の会合ももたれています。

ESD-Jでは、このキックオフミーティングを、ESDの10年をすすめるにあたって、主要な役割を果たすことが期待されている各機関の責任者たちが一同に集まる場と位置づけ、各方面に参加を呼びかけてきました。その結果、30を超える国連機関、国内NGO・NPO、報道機関、政府機関などから共催・協力・後援をいただき、当日は200名を超す関係者のみなさんが集まりました。

とくに会場の中央に置かれたラウンドテーブルには、政府機関から、外務省国際社会協力部長の神余隆博さん、環境省大臣官房審議官の桜井康好さん、文部科学省国際統括官室長補佐の浅井孝司さん、地域の代表として、岡山市長の萩原誠司さん、大阪府豊中市の財団法人とよなか国際交流協会事業課長の榎井縁さん、さらに産業界からは経団連社会貢献担当者懇談会座長で味の素株式会社広報部社会貢献部担当部長の長谷川公彦さん、マスメディアからは、読売新聞社東京本社調査研究本部の岩田伊津樹さん、そして、衆議院議員の小杉隆さんといったみなさんにお集まりいただき、ゲストのユネスコバンコク事務所のシェルダン・シェーファー所長や翻訳家の池田香代子さん、またESD-Jの阿部治代表理事らの発言も交え、さまざまな立場、分野、角度からESDの10年をいかにすすめるかについての意見交換を行いました。

■ 今後10年の対話に向けて、3つの成果と課題

今回の日本でのキックオフミーティングには大きな3つの成果があります。

第一は、政府機関、国会議員、企業、地方自治体、市民活動中間支援組織、マスメディアといったESDの推進にあたり重要な役割を期待される各分野の責任(担当)者たちが、限られた時間ながらも議論のために同じテーブルについたという点です。今年、「10年」のスタートの年であることから、それぞれの分野や地域ごとにもさまざまな「キックオフ」のイベントが予定されています。そうした各行事に先立って、今回の日本キックオフミーティングでこのように幅広い分野の関係者による対話の場がもたれたことは、今後の各方面での関連イベントを盛り上げていく点からも、一つの成果といえるのではないのでしょうか。

第二の成果は、こうした対話の場が、ESD-Jという市民ネットワーク団体の呼びかけにより実現した点です。ESDの10年は、もともと日本政府と日本のNGOが共同で世界に呼びかけたものです(外務省ウェブサイトをご参照ください)。ESDにおいて、市民(あるいは市民組織)は、政府の政策に意見を述べたり対案を示すこととあわせ、ときにはさまざまな関係機関の間の対話の場を用意し、各機関の当事者意識を引き出せる可能性も有しています。今回のキックオフミーティングにおいてESD-Jがそうした役割を果たせたことは、ESDの10年における市民(市民組織)の役割と可能性を内外に示しただけでなく、ESD-J自身もそのことを自覚できたのではないかと思います。

そして、成果の三点目は、一般国民への周知です。今回のミーティングは共同主催者となっていた読売新聞をはじめとする報道機関により、その模様が世の中に大きく報道されました(5ページ参照)。まだまだ十分とはいえないものの一般国民への周知という点も今回のキックオフミーティングの一つの成果といえるでしょう。

さて以上の三点を成果としましたが、今後に向けた課題も山積しています。最大の課題は、今回のような対話の場を今後いかに継続していくか、また懸案となっている日本政府全体としての担当部署の設置も含め、国内におけるESDの10年の実施計画をいかに実効力のあるものとして構築し、推進していくかにあります。こうした課題を念頭におきつつ、今回の日本キックオフミーティングが、国内外の今後のさまざまな対話の場の創造と発展につながることを期待しています。

降旗 信一(ふりはた しんいち)

ESD-J理事。社団法人日本ネイチャーゲーム協会理事長。博士(学術)。今春、東京農工大学に博士論文「現代自然体験学習の成立と発展」を提出しました。環境教育学・自然体験学習論の立場からESDに関心をもっています。

「国連 持続可能な開発のための教育の10年」キックオフミーティング 未来へのまなびをはじめよう

2005年3月6日(日) 13:30-16:00

立教大学 太刀川記念館

主催: ESD-J、読売新聞社

共催: 12団体 協力: 22団体

主なプログラム

▶基調講演①シェルダン・シェーファー
(ユネスコバンコク事務局長)

▶基調講演②池田香代子(ドイツ文学翻訳家)

▶リレートーク「ESDの10年への提案」

地域: 岡山県岡山市、大阪府豊中市

日本政府: 外務省、環境省、文部科学省

産業界: (社)日本経済団体連合会

マスメディア: 読売新聞社

衆議院議員

▶キックオフ・セレモニー



キックオフミーティングへ 実行委員として参加して

前田 博昭

「ESD」とはなにかを ESD-J 事務局のみなさまに質問をぶつけながら始まった実行委員の活動でしたが、多くの人とネットワークができたうえに、ESDの深い意義を実感する機会をもて、実行委員をやって本当によかったと思っています。感想を三点述べます。

第一に、さまざまな NGO、NPO 団体の情熱をもった若者と出会ったことです。熱心に取り組む彼らを見ていると、希望が湧いてきます。

第二、環境をはじめ、さまざまな分野の団体が力を合わせて取り組むことで、すばらしい相乗効果がでるということです。他の団体との交流や協働は今後ますます重要であり、その受け皿になることができる ESD 運動の懐の深さを実感できました。

第三には、だからこそ日常の自らの団体での地道な活動、実践が大事だと思いました。日常の実践とその成果を何倍にも増幅できる ESD の活動を、できることから両輪として、今後も多くの方々と意義ある時を刻んでいけたらと思います。

NPO 法人 EG 倶楽部 理事
(NPO 法人読書 DO 代表)

まずは、できることから一歩を 踏み出そう

川上 千春

最近いろいろな場面でとりあげられるようになった「もったいない」という言葉。英語ではどのように表現するのか？と調べていたら、そのなぞがシェルダン・シェーファー、ユネスコバンコク事務所長による「ESDの10年がめざすもの」と題した基調講演で解けた。"too precious to be wasted"。3月1日ニューヨークの国連本部で行われた UNDESDの開始式典で演説した有馬朗人元文相のスピーチで触れられた言葉を紹介されたからだ。

ESD の概念は幅広く、なにをどこから始めたらいいのか、苦悩しているのは私たちだけではないだろう。それでも3月1日のキックオフミーティングでは、この「もったいない」をはじめ多くのヒントを得ることができた。そしてなによりも会場に多くの「仲間」が集まり、立ち席もでるほど熱気に包まれていたことに、大いに励まされ元気もらった。国連の ESD 元年。あまり難しく考えず、まずはできることから一歩を踏み出そう……そんなふうに思った。

(社)日本ユネスコ協会連盟広報室

企業人として共に考え 行動したい

長谷川 公彦

3月6日、「ESD」のキックオフミーティングに参加させていただきました。

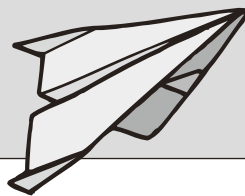
会場に入って、最初に感じたことは、参加者のみなさまのなごやかで明るい笑顔と、大きな目標に向かって踏み出そうとしている熱気のすごさでした。ついつい、自分もずっと以前からこのメンバーの一員として活動を共にしてきたかのごとき錯覚にとらわれてしまいました。

「持続可能な開発のための教育」は、次世代に対する私たちの責任であり、大切な役割であることは論を待ちませんが、社会を構成する多くのセクターが、この目標を共有し、組織を超えて共に汗を流して取り組んでいくことにより、大きな成果が得られるものと信じます。

私たち企業に身を置く者としながらも、企業人として、また地球市民の一人として、「持続可能な開発のための教育」のための実践活動を、みなさまと共に考え行動していきたいと思っています。

日本経団連 社会貢献担当者懇談会座長
味の素 (株) CSR 推進本部 CSR 部

未来への思いを紙飛行機に乗せて



キックオフミーティングでは、「ESDの10年、take off(離陸)」への思いを込めて、この10年で実現したいこと、そのために取り組みたいことを各人が折り紙に書き、紙飛行機でいっせいに飛ばしました。3月19日の読売新聞記事とともに、メッセージの一部を紹介します。

公共交通へのモーダルシフトをすすめるとともに環境共生型のまちづくりをすすめていきたい。そのために、日本にはまだ新設あるいは導入されていないLRT(次世代型路面電車)や電気バスについての知見を深め、導入実現に向かうかたちで貢献したいと思っています。

実現したいこと!
「マイノリティ」という言葉が消えてなくなるくらいに多様性が尊重される社会にする。
取り組みたいこと!
とにかくアクションかな。言う前にあきらめないこと。

老若男女問わずすべての人が地球環境など、私たちの身の回りでのできごとに関心をもち、自分はどうのような行動をすべきか、自ら考えられるようにしたい。そのために、教員になって子どもたちと一緒に持続可能な社会のために自分たちにはなにができるか考え、実行に移せるといいと思います。

(31)

12版

2005年(平成17年)3月19日(土曜日)

富山

国連・持続可能な

国内での推進体制考

「市民は輸入できないの燃料に頼ってしまう。大事なのは、全国どこでも大勢いる、あるいは大勢を『つなぐ』ことだ。」と述べた。これは、ESDの推進体制をめぐって、市内の各機関が打ち合っている結果として生まれた。市内の各機関は、環境・労働・福祉・教育などの分野で連携し、互いに補完しあっている。



■ 基調講演

「南北問題」の存在知ろう

池田香代子

ドイツ文学者翻訳家・口承文芸研究者

インターネットのつらさを、先に出版した「世界がもし1000人の村だったら」の原書は、米国の環境学者トマス・ヘドウスさんが新聞コラムに書いた記事だった。そのヘドウスさんが書いた別のコラムに「スリランカで考えた、人々が幸せになるための3つの条件」という題がある。

一つ目は、きれいな環境があること。二つ目は、いまいる所から戦争や自然災害で逃げないこと。三つ目は、医療を受けられること。四つ目は、教育を受けられること。そして五つ目は、伝統や文化に誇りを持つこと、それを誇れること……と

なっても幸せになれないというところ、まさに持続可能な社会といえる。

東は「1000人の村」で、ESDに関する部分を書いた。南は、文字を持たない民族の文化の素晴らしさを知っていた。しかし、その時、文字を知らないがために、言葉や人を差別された。村の人を捕まえて

と取られたりする例を知り、復讐心で、「ESDの10年」が、2000年を過ぎた。「国連・ESDの10年」とも成功するよう奮闘している。

私はいま、バスタウンに学校を建設し、教育費を返済運動を進めている。生徒は400人で、費用は年間、日本でも安い1人を毎月5万円と7年70

万円を払ってやる。南北問題がある。さきほど「もったいない」という話だったが、その日本では毎年1000万人の食糧が捨てられ、世界の食糧増産の総額は7000万円。そんなエピソードは知らない。「ESDの10年」を通じて、そのことを知らなくてはならない。

近江社会福祉センターが、市民の疑問を解消するために、ESDの推進体制をめぐって、市内の各機関が打ち合っている結果として生まれた。市内の各機関は、環境・労働・福祉・教育などの分野で連携し、互いに補完しあっている。

「持続可能な開発のための教育の10年推進会議」(ESD-J)「ESDの10年」を国内で推進するため、2003年6月に設立されたネットワーク組織。ESDの推進事業や地域ミーティングを全国各地で開催している。今年5月にはESDをわかりやすく紹介した「ESDの10年・キックオフブック」を無料配布する。詳しくは、ホームページ(<http://www.esd-j.org>)。

全省庁が連携を

「エフエフエフ。政府には、①あらゆる省庁が連携・参加する推進本部を設け、②国連・ESDの10年を契機として、全国的なESDの推進体制を構築する。③ESDの推進体制を構築する。④ESDの推進体制を構築する。」

現在政府の対応が滞っているため、国連はESD「10年」の推進体制を構築する。ESDの推進体制を構築する。ESDの推進体制を構築する。

拡大する人

20世紀は同時に、石油などの化石燃料を中心とするエネルギー革命、地球の生物資源を徹底的に切り取り、環境が劣化した。その結果、その増加の大半は化石燃料の使用が原因とされている。

「ESDの10年」の推進体制を構築する。ESDの推進体制を構築する。ESDの推進体制を構築する。

ESD=Eda

■ 主催 特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年推進会議」(ESD-J)、読

渋谷の若い人までが「ポイ捨て? そんなことしねえよ」と誇らしく話す日本、「もったいない」を“みつともない”と思わない本来の日本人の価値観を、文化を通じて広めたい。

子どもが社会(地域)で育てられるように、昔の日本のような社会の実現とそのための自分の地域での出産・育児における支援。

持続可能な社会の実現のために、持続不可能なストレスをかかえるのを早く終わりにして、小さくとも確かでゆっくりとした暮らし、持続可能な暮らしを早く実現したい。10年後には、山村の小さな集落で自然に寄り添った生活をしたい。

■ 基調講演

「もったいない」を大切に



先月、ニューヨークで「ESDの10年」の調査全体のキックオフミーティングがあり、講師した有馬朋人(友成)が日本の伝統的な考え方を語られた。それは「もったいない」という日本語で、「ESDの10年」にとって非常に重要な概念だと、感銘を受けた。

「ESDの10年」が目指すのは、持続可能な社会を築くために必要とされるグローバルな共通の価値観を、世界のすべての人が享受できることだ。

その際、単に知識を授けられ、その知識を身につけてもらうだけでは、その知識を三つの柱(社会・経済・環境)の三つに柱を打ち、それぞれの柱となる領域との多様な文化が持続可能な

シエルダンシエーファー

ユネスコ・パンコラ事務局長

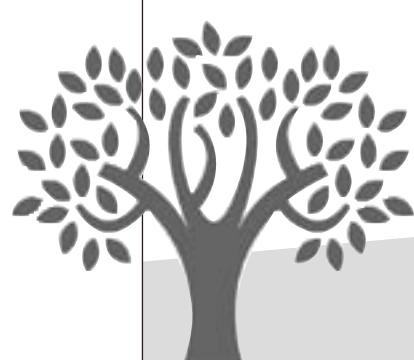
けなければならない。

その実現のためには「教育」が不可欠だが、その際、学校の教師が教える従来の教育にとどまらず、市民参加型のあらゆる方法で普及していかなくてはならない。

その際、単に知識を授けられ、その知識を身につけてもらうだけでは、その知識を三つの柱(社会・経済・環境)の三つに柱を打ち、それぞれの柱となる領域との多様な文化が持続可能な

農村や人権、男女間の不平等、人口、エイズなどの感染症、農村の貧困、異文化間の違いなど多様な問題を挙げ、「持続可能な開発」という価値観としてとらえ換えていくことが重要だ。

この上段、自治体、地域社会、企業、国際機関(UNESCO)、家庭など、さまざまな主体が連携し、



開発のための教育の10年

キックオフミーティング

提唱国日本 リーダー役

次世代に学びを継がないための基盤は、どうしたら実現できるのか。「国連・持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」が今年始まったのを機に、国内での推進体制を構築するキックオフミーティングが、立教大学(東京・池袋)で開かれた。参加したのは、「ESDの10年」をすでに推進している地方自治体のほか、関係団体や企業、民間活動団体(NPO・NGO)、政府要員各陣の代表。参加者は、ESDの10年の推進国・日本が世界に率先して活動を進めていかに貢献し、今後の具体的な取り組み方を議論した。

岡山県では、市の環境教育推進員が、日本経済連連盟(全国規模)と連携し、民間企業や市民が参加する「ESDの10年」を推進している。岡山県では、市民参加型の都市づくりを積極的に進めている。岡山県の環境教育推進員は、岡山県教育委員会と連携して、民間で行ってきた。しかし、最



レートを今後の取り組みを議論

界では日本の貢献が注目を集められておらず、外にも注目を集めていくことが大切にと語った。

このほか、経済、環境、文化科学の各府県が連携して取り組んでいる関係団体や今後の方針を説明。参加者は、ESDの10年の推進をめぐって「ESDの10年」を推進していかに貢献し、今後の具体的な取り組み方を議論していき

■ 提言 ■ 阿部 治 ESD-J代表理事、立教大教授



「ESDの10年」は、小規模な自治体の民間活動団体(NPO)とも、2000年のヨハネスブルク環境サミットで掲げられたことだ。

日本では、その意義は国際貢献であるとともに「教育」であり、持続可能な開発の、地方の活性化を促進する重要な役割を担っている。

また、現状では課題もある。「ESDの10年」を一元的に推進する者がいない

■ 背景 ■ 偏在する資源



20世紀は人類史上、最も激しい大規模に、人間の活動が地球化した100年だった。

世紀初頭に約1億人だった世界の人口は、1900年代には約15億人を突破した。西暦2000年を境にして、人口が、2億人から3億人へと増え、100年間で10倍増した。20世紀は、まさに「人口爆発」の世紀と評される。その後の増加傾向は、20世紀後半には10億人を突破し、21世紀には15億人を突破する見込みだ。

大規模生産・大規模消費・大規模廃棄物を生み出す現代社会は、自然破壊を引き起こ

「ESD とよなか」 キックオフ！

～市民・行政・異分野の団体をつないでみえてきたもの

大阪府豊中市環境政策室 荒井 啓子

豊中市は大阪府北部にある人口約 39 万人の都市です。観光資源や主だった産業などはなく、大阪都市圏のベッドタウンとして発展してきました。

しかし、市内には空港や名神高速道路などの幹線道路があり、早くから騒音公害などの環境問題に取り組んできました。また、教育問題をはじめ、環境、人権問題など、地域の課題に対して、市民が主体的な取組みを展開してきたことが、豊中の特徴です。この活発な市民活動こそ、豊中市の大いなる財産であり、地域資源です。

環境基本計画策定とローカルアジェンダの動き

豊中市には、環境基本条例にもとづき平成 11 年に策定した行政計画「環境基本計画」と、ときを同じくして策定された市民行動計画「豊中アジェンダ 21」があります。この 2 つの計画は、めざすべき都市像や理念目標を共有し、市民・事業者・NPO と行政が、共に豊中の環境について取り組む、「協働とパートナーシップ」を基調としています。これは、策定当時から大変先駆的なものでした。

その後、策定にかかわった市民組織のなかから「NPO 法人とよなか市民環境会議アジェンダ 21」が生まれ、活発な活動が始まりました。また、2004 年には、社会変化や新たな取組みの必要性などに対応するため、両計画を見直しました。

そのなかでは、地球規模の環境問題の解決に向けて、地域の取組みや市民参画の重要性、具体的な目標、進行管理などを盛り込み、環境目標の一つである「協働（パートナーシップ）型活動参加者数」に具体的な数値目標を定めています。これは、活動の広がりこそが、課題解決に向けて重要な要素となるからです。

学習の場をもってみえてきた共通認識

環境問題への取組みをすすめるなか、2004 年 6 月に所沢市で行われた環境省の研修で「持続可能な開発のための教育の 10 年」という国連活動を初めて知りました。そして、「とよなか国際交流協会」からも同じ言葉を聞き、「とにかくなにかやってみよう」となったのです。



子ども主体の写真ワークショップにて。おっかなびっくり……。テーマは働く人。全体を写すにはもう少し離れたいけど車道は危険。まちには危険もいっぱいあるのです。

まず、市民と行政職員が、学びの場をもちました。ESD という概念は、わかりにくい、難しいという感想に終始しましたが、具体的にみえてきたものがあります。活動の分野が違って共通の悩みがある、「持続可能な開発のための教育」をキーワードにすればどんな活動もつながる、そして、現代の課題を解決しながら「未来」を次の世代へ渡すことが私たちの責任であるという認識です。

これまで、人権問題・環境問題・福祉問題などの課題について、行政、市民活動とも、積極的に取り組んできました。しかし、行政・市民活動とも、横のつながり、活動の広がりを求める時期にきていました。

環境を例にとると、ごみ減量・省エネに向けて、環境フォーラムなどの開催から、日々の勉強会やエコライフカレンダーの取組みまで、じつに多種多様な草の根の活動に取り組んでいます。しかし、参加者の顔ぶれを見ると、いずれも見知った人が多いのです。果たして市民 39 万人に対し、どこまで広がっているのでしょうか。ESD の学びの場で人権問題に取り組む人が言った言葉が印象的です。「そもそも、本当に気づいてほしい、かかわってほしい人は、興味がないと言って参加しません。逆にいえば、参加する人はもともと関心があるので本当は問題提起をするまでもないのです」。

多様な立場や年齢の人に参加して意見を出してほしいと願っても、いつのまにか同じ人の集まりになっています。そして、参加しない人は、いつまでも変わらないのです。では、異なる課題について一緒に考える場があればどうでしょう。一方に興味がなくとも、もう一方が関心のある分野なら参加するのではないのでしょうか。そして、同じ場で話ができれば、思いがけない意見が聞けるかも知れません。この考え方こそが、豊中における ESD だったのです。

子どもと一緒にタウンウォッチング

ESD との出会いから間もない 8 月、国際交流団体、環境 NPO、人権団体、行政 3 課が協働して、写真ワークショップを開催しました。子どもが主役となり、テーマを決め、まちに出て写真撮影し、映像をとおして、まちを見直し、今と未来について考えるというものです。

子どもを主体としたのには理由があります。これまで後回しになってきた者、すなわち少数や弱い立場の者が自ら発信する、強者が弱者を思いやるのではなく、共に学びあいながら生きる社会こそ、持続可能な社会、循環型社会への道筋になるという考えが、話し合いのなかから生まれてきました。また、テーマも議論になりました。自然環境を守ることが、ときには障害者の生活を不便にすることも考えたい。まちの発展と自然保護は本当に相反するの？——これからどんな発見があるのか、環境も人権も含んだ、これまでと一味違う取組みになりそうでワクワクしてきます。

そして、ワークショップでは、自分で選んだテーマを探し、まちを歩きまわって、たくさんの写真を撮りました。おもしろいことに、写真には素直な感情が映し出されます。好ましいものは近くからパチリ、得体の知れないものは遠目からパチリ。子どもたち

kick off!

海外では、どうキック オフされている？

ユネスコアジア太平洋地域教育局 ESD ユニット インターン
はぶ 真弘

国連教育科学文化機関(ユネスコ)の国際実施計画のスケジュールに従って、今年3月1日にニューヨークの国連本部で、ESDの10年の国際レベルでのキックオフイベントが開催されました。各国代表、国連機関、NGOから約160名が参加し、DESDの実施における課題についてのパネルディスカッションが開催されました。また、松浦晃一郎ユネスコ事務局長、有馬朗人日本政府代表、アナン国連事務総長夫人、サラユニセフ事務局長ならびにスティーブン・ロックフェラー・ロックフェラー兄弟財団理事長が講演を行いました。

アジア太平洋地域では、3月5日にニュージーランドでも国内レベルのキックオフイベントが開催されました。このイベントでは、ECOSHOWと題された企画のなかで、Pacifika groupによる演奏、小学生によるESDについて表現した劇や、Trash To Fashion(ゴミをファッションに)と題されたファッションデザインが披露されました。なお、ニュージーランドでは、「ESDの10年」の呼びかけに対応するニュージーランドとしての活動を主導し、政策提言を行い、活動を推奨する目的で、ユネスコ国内委員会が中心となってESDの10年国内調整委員会が形成されています。

6月28、29日には、アジア太平洋地域レベルのESDの10年開始、ならびに関連イベントが名古屋で開催されます。地域の各国をはじめ、ユネスコ本部やアジア太平洋事務所、その他の国連機関から代表が来日される予定で、地域を代表する開始イベントが開催されます。また、オーストラリアならびに中国で、ESDの10年関連イベントが開催予定となっています。

最後に、ユネスコアジア太平洋地域教育局のESDユニットでは、この地域で行われるESDのイベントや活動について、ウェブサイトにて紹介しています。今後も地域のイベントがフォローアップされますので、どうぞご覧ください。(www.unescobkk.org/esd)

(注)筆者は6月3日をもってインターンとしての任務を終えております。また、本文はユネスコアジア太平洋地域教育局を代表するものではありません。



ニュージーランドでのESDの10年キックオフイベントにて、ESDについて、小学生が劇で表現。



カメラマンの愛用品に触れる貴重な体験。カメラマンになった自分を想像したり、望遠レンズに驚いたり。

は、なにを撮ろうかと躊躇したのもつかの間、2時間のタウンウォッチングの最後には、「フィルムが足りないっ」と大騒ぎでした。

まとめの時間、子どもたちを見て感じたことがあります。自分が住むまちをレンズ越しに客観的に見る経験をとおして、子どもたちは、まちに小さな命が数多く息づいていると気づき、そこから、人と人のつながり、人と命のつながり、人とまちと命のつながりを感じとったようでした。同時に、スタッフの私たちも、自分とは違う考え方があること、違うグループの人たちと共に活動することに、新鮮な感動を覚えました。

ムリのない持続可能な活動で、 かけがえのない未来を次世代へ

そして、2005年に入り、いよいよ国連ESDの10年がスタートしました。豊中市では2月26日にキックオフミーティングを行い、今後の取組みに向けた熱い想いを共有しました。しかし、10年という長い期間です。行政も市民もムリのない形で、可能な部局から徐々に連携を広げています。新たな人が参加できるプロジェクト、振り返りや軌道修正のための勉強会、実践の場など、さまざまなかわり方を考えながら、プログラムを組んでいきます。

豊中という地域で、私たちは“未来”という共通のテーマに向かって手探りで歩み出しました。活動を持続可能にするために、歩みは、小さくゆるやかです。けれど、その踏み出した一歩を、二歩三歩と10年かけて歩いていけば、次世代にかけがえのない“未来”を残せると信じています。

ESD とよなか

行政・各種団体のゆるやかな組織。1 情報収集 & 提供。2 振り返り & 担い手の育成を目的とする勉強会などの開催。3 協働事業の実施、広報全般。これらを各自可能な範囲で担う。
<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~toyonaka/esd/>



荒井 啓子 (あらい けいこ)

1970年豊中市生。大学卒業後会社勤務を経て1998年から嘱託職員として豊中市教委で文化芸術振興業務に従事。中学校移動美術館や人権感覚育成モデル事業など、市民・行政の協働型事業を企画。2004年豊中市役所に就職、環境政策室で基本計画の見直しに従事、現在に至る。

愛知万博で「持続可能性へのシンポジウム」が開かれました

4月17日、愛・地球博の地球市民村にて、財団法人2005年日本国際博覧会協会主催、ESD-Jの企画協力で、「持続可能性への学び」シンポジウムを開催した。シンポジウムは3部構成で、国際的な視点や日本の教育的課題の視点からみたESDがめざすものについての講演のほか、各地の取組みの事例紹介をとおして、ESDの具体的なイメージを提案・検討した。

第一部では、ESD-J代表理事の阿部治さんが、ESDのめざすものは知識・体験・対話・共有をとおして、共に生きる力・つなぐ力をはぐくむことだと語った。ユネスコバンコクのデレック・エアラスさんは、多様な課題を抱えるアジア太平洋地域で、それぞれの地域の価値観にあった形でESDをすすめる必要性を語った。文教大学教授の嶋野道弘さんは、学校教育をESDの観点から充実させるには、総

合教育・基礎教育のバランスの取れたカリキュラムづくりが重要と語った。

第二部では、阿部治さんが、多分野・広範なセクターをつなぐ活動を行ってきたESD-Jの取組みを紹介。藤前千潟を守る会の辻敦夫さんは、干潟の命のつながりを学ぶ「百見一触」の体感教育の活動を紹介した。岡山京山地区ESD環境プロジェクト(岡山KEEP)の池田満之さんは、岡山市の地域住民との協働による体験・体感を重視した活動を紹介。さらに岡山KEEPの中高生4人は、活動のなかでつかんだ、風土と歴史や世代を超えたつながりの重要性などを訴えた。

第三部では、講演者が地球市民村の各パビリオンのプログラム体験した感想として、「自分を発見するとともに、相手に対する主張がみられる」など述べた。会場からは、地球市民村や瀬戸愛知県館に本当の万博のメッセージ



がある、などの感想が聞かれた。最後に、4月の出展団体であった北海道ウタリ協会釧路支部、おかざき匠の会、ホールアース自然学校、EcoPLUSが、各パビリオンでの持続可能性の学びに向けた取組みを紹介した。

(レポート: ESD-J事務局 野口 扶弥子)

*詳細報告は、ESD-Jウェブサイト (www.esd-j.org)、地球市民村の取組みについては市民村ウェブサイト (<http://www.global-village.expo2005.or.jp/ja/>)を参照。

ESD に期待します!

ドイツ文学翻訳家・ESD-J顧問 池田 香代子

わたしは昔話を勉強してきたので、長い物語を暗記している、文字の読めない語り部さんたちを尊敬してきました。それで、教育のことはあまり考えたことがなかったのですが、あるきっかけで目を開かされました。

それは、『世界がもし100人の村だったら』の出版です。この絵本のテキストは、1通のチェーンメールを書き直したのですが、そのチェーンメールの原案者であるアメリカの環境学者、ドネラ・メドウズさんのエッセイ、「貧しい人びとが幸せになる5つの条件」に書かれた条件の1つが、「基礎教育を受けられること」でした。わたしはこのことから、さまざまな暴力が大手を振るう現代、自分の尊厳や権利を守るには読み書きの力が欠かせない、ということを知ったのです。

そうした途上国での教育の普及の努力のいっぽうで、わたしたちにはなにができるか、しなければならぬかを問い続け、ささやかでもいい、おこないを積み重ねていくきっかけに、ESD になることを、期待しています。



池田 香代子 (いけだ かよこ)

1948年東京生まれ。翻訳家、口承文芸研究者。主な訳書に『ソフィーの世界』『夜と霧』など。『世界がもし100人の村だったら』の印税で「100人村基金」を立ちあげた。世界平和アピール七人委員会メンバー。

私自身の「総合的な学習」のために

独立行政法人国立少年自然の家理事長
ガールスカウト東京8団リーダー 松下 俱子

「一人ひとりの少女が、幸せな一生を送ることができるように」という創始者の願いのもとに始められたガールスカウト運動に参加して約50年。スカウトとして、指導者として日常的な具体的なさまざまな活動をするなかで、「自分に与えられた命、能力(ちから)に感謝して、ちからを磨く」「共に生きる地球上のさまざまな人びとの多様性を受け容れる」「自分にできることで、人に役立つ生き方ができる」といったことに気づかされ、学ばせていただき、そうしたことに努力してきたように思います。それが、次代の担い手である少年たちに、自然の中での体験活動を支援する少年自然の家の運営にかかわる仕事を引き受け、野外教育、環境教育、開発教育、生涯学習に関する諸活動に参加する現在につながっているのだと思います。ESD-Jの設立を知ったとき、前述のキーワードすべてを考える活動だと感じ、勉強しよう!と会員になりました。仕事のなかで、ガールスカウト活動のなかで子どもたちに伝えなければならないことを、プログラムとして考え出せるように、会員の方々の多様な活動からたくさん学ばせていただきたいと願っています。

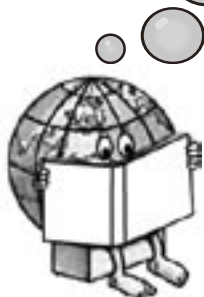
松下 俱子 (まつした ともこ)

現在、ガールスカウトでは、最年少部門(テンダーフット5歳児対象)のリーダーとして活動。仕事は、全国に14ある国立少年自然の家が構成している法人の運営の責任を担って、法人本部のある福島県と東京を往来して勤務している。



私がESD-Jに入ったわけ

ESDを 知ろう



UNESCO ESD マスコット「DDくん」

ミレニアム開発目標 (MDGs)

2000年の国連ミレニアム・サミットで採択された国連ミレニアム宣言と、1990年代に開催された主要な国際会議やサミットの国際開発目標が統合されて、ミレニアム開発目標 (MDGs) となった。貧困撲滅、初等教育の普及、ジェンダー平等と女性の地位向上、幼児死亡率の削減、妊産婦の健康改善、HIV/エイズ・マalariaなどの疾病の蔓延防止、持続可能な環境づくり、グローバルな開発パートナーシップの構築の8つの目標について、2015年までに具体的な目標を掲げて実現することがめざされている(上條直美)。

ESD 基本用語集 vol.4

ESD を読み解くためのキーワード。
こんな言葉も実は ESD につなが
っているのです。

ステークホルダー

日本語では「利害関係者」と訳され、ある組織や事業の目標を達成するために不可欠な人や組織のことをさす。主なステークホルダーは、(1) 許可可や資金援助を行う人や組織、(2) 組織や事業活動に直接的な影響を受ける人や組織、(3) 間接的に影響を受ける人や組織、(4) 影響も参加もしないが、賛成・反対のいずれかの意見によって影響を与えることのできる人や組織をいう。持続可能な開発に取り組むさいに「すべてのステークホルダーの参加が必要」という用い方をする。(小栗有子)

子どもの居場所

文部科学省では、平成 16 年度から緊急対策として 3 ヶ年「地域子ども教室推進事業」を実施している。この事業の背景にあるのは、子どもたちにかかわる重大事件の続発や青少年の問題行動の深刻化があげられるが、そもそも子どもにとっての居場所とはなにか。たんに物理的な空間のみならず、自分自身が受け入れられる人間関係や、その関係のなかで過ごす時間も、大切な「居場所」として位置づけられるだろう。子どもの居場所をつくることは、とりもなおさず、コミュニティがもっていた教育力の復興、人と人、人と自然とのかかわりを再構築させることでもある。(松本恵)

ESD 関連の本

「教育と持続可能性 グローバルな挑戦に就いて」

レスティエー発行

IUCN-CEC (国際自然保護連合—教育とコミュニケーション委員会) 著 小栗有子・降旗信一監修

本書では、ESD の成立と発展、その基本的な考え方や原則について、国際動向から地域の草の根レベルにまで目配せをしながら、今日の議論の到達点が示されています。ESD の 10 年国際実施計画の策定にもかかわったジョン・フィエンや、はじめて ESD の概念を提示したとされるアジェンダ 21 第 36 章の起草者であるチャールズ・ホプキンスらによる理論編に加え、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカなど、世界 15 の国と地域の取組みが報告されています。(降旗 信一)

- A4 版、191 頁、2003 年 12 月発行 初版は無償配布、増刷分より一冊 1500 円で頒布
- 購入方法：題名、冊数、氏名、電話番号、送付先を明記のうえ、ESD-J 事務局書籍販売係へ



ゴミに暮らす人びと — 開発・環境・人権を考えるヒント集 —

財団法人アジア・太平洋人権情報センター発行 解放出版発売

ヒューライツ大阪が設立 10 周年記念事業として実施した AWARD2004 (国際人権教材奨励事業) の受賞作品の 1 つである写真家・宇田有三さんのスライドショー「ゴミに暮らす人びと」の解説本です。プリント・バージョンに、宇田さんのエッセイや、持続可能な開発に関する資料として、ESD 国連開発計画 (UNDP) の「人間開発報告書」の概要、ESD-J についても紹介しています。環境と開発と人権を相互に結びつけることの大切さを呼びかける ESD の学習のテキストです。(前川 実)

- A5 判 152 頁、1,575 円 (税込)、2005 年 5 月
- 購入方法：(財) アジア・太平洋人権情報センター (TEL: 06-6577-3578) へ (送料 210 円)

■ ESD をとりまく状況

いよいよ今年から「国連持続可能な開発のための教育の10年」(以下、「ESDの10年」)がスタートしました。各国では民族色豊かな「ESDの10年キックオフミーティング」が開催され、これまで地道に続けられてきた持続可能な社会づくりに向けた活動が、にわかには脚光を浴び始めています。日本においても内閣総理大臣自らが推進本部長となった「ESDの10年推進本部」が内閣府に設置され、政府・教育関係者・NGO・企業などからなる「ESDの10年円卓会議」もスタートしました。今年度中には「ESDの10年日本実施計画」がこの円卓会議の議論からまとめられる予定です――。

……という報告をできることが、去年の今ごろ ESD-J がめざしていた目標でした。しながら国連および日本国政府の取り組み状況は、当初の予測よりはるかに遅れているのが現状です。国連レベルでは、2004年10月にユネスコが国際実施計画最終案を提出したものの、その確定の時期は秋以降に持ち越

されました。また日本国政府は2004年9月に6省(外務、環境、文科、経産、国交、農水)による関係省連絡会議をスタートしたものの、推進体制づくりや「ESDの10年日本実施計画」策定についてはまったく見通しがたっていません。

■ 2005 年度の活動方針

このような状況を踏まえ、ESD-Jは2005年度の活動計画を策定しました。もちろん中央政府や国会議員に「ESDの10年」への積極的な取組みを働きかけていく必要があることに変わりはありません。また「ESDの10年」を人びとに周知することも重要だと考えます。

しかしその一方で、「ESDはよくわからない」「ESDは重要だと思うが、なにをどうすすめていけばよいのか」という多くの声に答えていく必要があります。国際実施計画などで世界共有の理念は明確になりつつありますが、日本の地域における具体的な取組みイメージはまだまだ漠然としたままです。そのイメージを共有できるようになることが、国内でESDをすす



地域の動き

地域の動きを「全国ウエーブ」に

— 地域 PT2005 年度活動プラン

「学びと社会参加のプロセス」や「持続可能な地域社会の担い手育成のための仕組みづくり」に地域がその特色を活かしながら取り組むこと、すなわち地域に根ざした ESD 活動が、今、日本の各地いろいろなところで始まっています。

「ESD を可視化する」3つの活動

今年度地域 PT では、地域の多様な動きをキャッチし、スポットライトを当て、「ESD 活動を見えやすくする = 可視化する」ことを活動の中心に置きます。また、各地の ESD 活動の担い手がさまざまなステークホルダーを巻き込みながら、地域や国や世界を動かす原動力となっていくよう仕掛けていくことにも取り組みます。具体的には、
 (1) 「ESD 地域ミーティング」開催を希望する地域への支援: 日本各地に ESD の種をまき、芽をともに育てる活動です。
 (2) 先進事例調査、ESD 実践事例集お

よび地域戦略シナリオづくり: これまでの ESD ミーティングの成果や地域の先進的な活動を取り上げ、ESD 普及のヒントを掲載する冊子をつくります。

(3) ESD 活動の仕組みづくり支援として地域ブロック制の試行: 地域やセクターをつなぎ、具体的に地域に必要な ESD の仕組みを見出す会議です。現在、中部と北陸で地域ブロックミーティングの開催を予定しています。

あなたの地域でも「ESD 地域ミーティング」を

「ESD 地域ミーティング」は、これまでに全国 23 カ所で開催されました。開発、環境、福祉など多様な分野で活動する地域の人びとやセクターが「未来をつくる教育 ESD」をキーワードに集い、持続可能な社会づくりに向けてどうネットワークを組み、どの方向に活動を発展させていくか、

戦略を練るための契機と位置づけてきました。

ミーティングを企画、実行していくプロセスのなかで ESD の具体的なイメージが共有されていくこともあります。私の地域でも開催を……、という方は、ぜひご相談ください。地域に合ったミーティングの企画・実践を ESD-J がサポートします(お問い合わせは、12 ページ ESD-J 事務局まで)。

国連 ESD の 10 年が、日本国内でどのように発展していくかの鍵は、地域が握っているといっても過言ではありません。地域から ESD を発信しましょう!

伊藤 通子 (いとう みちこ)

地域ネットワーク PT メンバー。富山県在住。開発教育のグループ「とやま国際理解教育研究会」事務局長。県内の技術者や研究者らと立ち上げたエコテクノロジー研究会では、科学技術の側面から環境教育を推進する。里山の降る農家を買って移り住んで5年になる。

のESD戦略”

めるために、今最も大切なことだと考えています。

2005年度はこれまで以上に地域の動きに注目し、モデル的な取組みを調査したり、ときには仕組みづくりに参画しながら、具体的なESD像を発信していきます。ESD実践地域の姿を見せること、そしてその成功要因を洗い出すことは、ESDの理解をすすめる、またESDを推進したいと考えている多くの地域のサポートへとつなげていくことができるでしょう。そしてその成果は、いずれ策定されるであろうESD日本実施計画などへの具体的な提案となるに違いありません。

■ ESD-Jの5つの活動

以上のような方針のもと、ESD-Jは右記のような活動に取り組んでいきます。各プロジェクトは会員参加によるプロジェクトチームで企画・運営していますので、ご関心のある活動にぜひご参加ください。

村上千里（むらかみ ちさと）ESD-J事務局長

1. 情報収集・提供および出版
ウェブサイトの運営、「ESDレポート」の発行（年4回）をとおした情報発信、「ESD-J2005活動報告書」の発行、「ESDの10年」キックオフブック（B5版小冊子）の制作
2. 研修および普及啓発
さまざまな教育関連会議でのESDに関する情報提供、出前講座の実施
3. 調査研究および政策提言
日本政府への働きかけ、ESD-J呼びかけによるESD円卓会議の開催（ESD推進に関する政策討議）
4. 地域ネットワークの形成および交流支援
地域ESDミーティングの開催支援、戦略地域におけるESDの仕組みづくり支援、先進事例調査、地域ブロックミーティング（富山、名古屋を予定）、全国ミーティングの開催（2006年2月4・5日）
5. 国際ネットワーク推進
英文ウェブサイトの運営、国際シンポジウムおよびアジア太平洋地域ESD推進戦略会議の開催（9月22～25日）。

アジア太平洋地域のネットワークに向けて

国際PTの3つの使命

国際ネットワークプロジェクトチームには、大きく3つの使命があります。一つは、国際的なネットワークをつくること、次に国外の情報を日本に紹介すること、そして日本の情報を国外に伝えることです。メンバーは約30名。昨年4月に発足してから、1、2カ月に1回の頻度で会合を開きつつ、国際会議に出席したり、ESD-Jを紹介する外国語パンフレットの作成などを行っています。

アジア太平洋の地域連携を呼びかけるシンポジウム

今年1月、ESD-Jはインドのアーメダバードで開かれた「持続可能な未来のための教育会議」に国際PTメンバーの3人を派遣。分科会での報告やポスターセッションをとおして、ESD-Jと同じような国内連携の組織を各国でつくり、アジア太平洋地



アーメダバード宣言文づくり

域のネットワークを構築しよう、と広く世界に呼びかけました。分科会で作成されたアーメダバード宣言にみられるように、この呼びかけは好意的に受け入れられました（『ESD-J2004活動報告書』86ページ参照）。

そこで国際PTは、今年の主要な活動として、アジア太平洋地域のネットワーク構築のための戦略的な会議の開催を企画しました。いろいろな可能性を検討した結果、9月22～24日の立教大学東アジア地域環境問題研究所による国際シンポジウムを共催し、翌日の25日にESD-J独自のアジア太平洋地域ESD推進戦略会議を開催す



ることになりました。6月始め現在、招待者の選定と会議内容を詰める作業を行っています。

一緒に楽しく活動しよう

ぜひ、たくさんの人に国際PTの活動に参加してほしいと思います。英語やほかの国の言葉が上手にできなくても、外国に行ったことがなくても気にすることはありません。ほかの国の人たちと一緒に活動したいと思っている人は歓迎です。

国際PTは内部の情報交換のためのメーリングリストとホームページもっていますので、遠いところの人も参加できます。お問い合わせは、裏表紙ESD-J事務局まで。

楽しく活動しながらESDを実践しましょう。

原田 泰（はらだ たい）

国際ネットワークPTサブリーダー。茨城県つくば市に住み、産業技術総合研究所計量研修センターに勤務。霞ヶ浦流域、インドネシア、タイの地域住民による環境調査に協力し環境教育の支援を行った。アクションリサーチ霞ヶ浦代表、参加型環境教育研究会事務局長。

ESD-J だより

ESD-Jは「国連持続可能な開発のための教育の10年」を追い風に、持続可能な社会の実現に向けた教育を推進するため、2003年6月に設立されました(2004年12月、NPO法人格を取得)。環境・開発・人権・平和・ジェンダーなど、社会的・教育的課題にかかわるNGO・NPOや個人の動きをつなぎ、大きな力としていくことをめざす、ネットワーク団体です。2005年、「ESDの10年」がついにはじまりました。これからの10年間を、どのように活かすことができるでしょうか?ぜひ一緒に考え、取り組んでいきましょう。

2005年春の活動報告

3月6日 「ESD地域コーディネーターミーティング」を実施

ESD地域ミーティングの開催を各地でコーディネートした方々を中心に、今後の地域におけるESD推進について話し合いました。

3月6日 『ESDの10年』キックオフミーティング～未来へのまなびをはじめよう』を開催

「ESDの10年」スタートにあたり、さまざまな立場の人びとが共に集い、10年を通じ実現したいことを語り合うシンポジウムを開催しました。詳しい報告を本紙2～5ページで特集しています。

3月21日 愛媛大学「国際・地域・環境」シンポジウムに協力

「持続可能な社会をさぐる」をテーマに、愛媛大学国際比較研究会が主催したシンポジウムに協力しました。

4月15日 ユネスコ・バンコク事務所 ESD担当デレック・エリアス氏、大阪府豊中市を訪問

愛・地球博シンポジウムのため招聘したユネスコESD担当エリアス氏が、ESD-J事務局長とともに、豊中市・財団法人とよなか国際交流協会主催イベント「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」がめざすもの～ユネスコとESD-Jからのメッセージ」にゲスト参加しました。

4月17日 愛・地球博、地球市民村にて「持続可能性への学び」シンポジウムに企画協力

ESDのあり方を国際的な視点や日本の教育的課題の視点から確認し、地域の取組みから考えるシンポジウムを、財団法人2005年日本国際博覧会協会主催、ESD-J企画協力で実施しました。8ページに報告を掲載しています。

4月18日 ユネスコ・バンコク事務所 ESD担当デレック・エリアス氏、岡山市を訪問

愛・地球博シンポジウム終了後、エリアス氏はさらに岡山市へ移動、小中学生との交流や岡山市長への表敬訪問の後、ESD-J・岡山KEEP主催「ユネスコのデレックさんを囲んで『未来への学び(ESD)』対話集会」で多様な参加者との意見交換を行いました。

4月27日 「3R市民フォーラム～世界へつなぐ市民ネットワーク」に参画

「3Rイニシアティブ閣僚会合」(4月28日-30日)へ市民の提案を届けるため、さまざまな側面から持続可能な社会づくりを推進する全国規模の市民ネットワークが呼びかけ合って結成した、市民フォーラム実行委員会に参加。閣僚会合前夜に公開フォーラムを開催しました。

5月7-8日 2005年度第1回理事会を開催

理事会合宿を実施、2004年度活動報告と2005年度活動計画、ESD-Jの中長期ビジョンなどについて2日間にわたり議論しました。

5月21-22日 日本環境教育学会第16回大会にてポスター発表・ESD小集会を実施

京都教育大学で開催された日本環境教育学会大会で、ESD-J会員有志がポスター発表と小集会を企画実施、ESDを推進していくうえでの課題や必要な取組みについて話し合いました。

団体正会員

- 財団アジア・太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪)
- 財団アジア女性交流・研究フォーラム
- 財団オイスカ
- 財団キープ協会
- 財団京都コースホステル協会
- 財団グリーンクロスジャパン
- 財団日本自然保護協会
- 財団日本野鳥の会
- 財団日本ユニセフ協会
- 財団日本YMCA同盟
- 財団ボーイスカウト日本連盟
- 財団野外教育研究財団
- 財団ユネスコ・アジア文化センター
- 財団ガールスカウト日本連盟
- 財団日本環境教育フォーラム
- 財団日本ネイチャーゲーム協会
- 財団日本ユネスコ協会連盟
- 財団農山漁村文化協会
- 財団部落解放・人権研究所
- 国立学校法人 筑波大学 農林技術センター
- 学校法人 日本自然環境専門学校
- NPO法人 岩木山自然学校
- NPO法人 ADP 委員会
- NPO法人 エコ・コミュニケーションセンター(ECOM)
- NPO法人 ECOPLUS
- NPO法人 ECOVIC
- NPO法人 開発教育協会
- NPO法人 ガラ紡愛好会
- NPO法人 環境市民
- NPO法人 環境文化のための対話研究所
- NPO法人 キーバーソン21
- NPO法人 くすの木自然館
- NPO法人 グリーンウッド自然体験教育センター
- NPO法人 グローバル・スクール・プロジェクト(GSP)
- NPO法人 国際自然大学校
- NPO法人 コミネット協会
- NPO法人 サイカチネイチャークラブ
- NPO法人 自然体験活動推進協議会
- NPO法人 持続可能な社会をつくる元気ネット
- NPO法人 樹木・環境ネットワーク協会
- NPO法人 人権NPOダッシュ
- NPO法人 生態教育センター
- NPO法人 地球環境と大気汚染を考える全国市民会議(CASA)
- NPO法人 地球の未来
- NPO法人 D&D 夢と多様性
- NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ
- NPO法人 ドングリの会
- NPO法人 ほっとねっと
- NPO法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし
- NPO法人 やまぼうし自然学校
- Earth Guardian 倶楽部
- アースビジョン組織委員会
- エコテクノロジー研究会
- エコプラットフォーラム東海
- NPO 政策研究所
- えひめグローバルネットワーク
- 岡山市役所(東京事務所)
- 岡山ユネスコ協会
- OAK HILLS(オークヒルズ)
- オーシャンファミリー海洋自然体験センター
- 環境 NGO アジア環境連帯
- 環境・国際研究会
- くりこま高原自然学校
- サステイナブル・コミュニティ研究所
- 「持続可能な社会と教育」研究会
- 森林たくみ塾
- スリーヒルズ・アソシエイツ
- 世界女性会議岡山連絡会
- 全国学校給食協会
- 仙台いぐね研究会
- 地域活動協働協会(LACA)
- 地球環境・女性連絡会(GENKI)
- 地球環境を守る会「リーフ」
- 地球市民教育総合研究所
- TVE ジャパン
- 帝塚山学院大学国際理解研究所
- とやま国際理解教育研究会
- 日本アウトドアネットワーク
- 日本環境ジャーナリストの会
- 日本ホリスティック教育協会
- ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン
- 東アジア地域環境問題研究所
- ホールアース自然学校
- 財団木文化研究所
- 財団バースセンス研究所
- 財団プラス・サーキュレーションジャパン
- 財団現代文化研究所
- 財団ポップ

ESD地域ミーティング共催団体募集!

お知らせ

2006年1月末までに「ESD地域ミーティング」(本紙10ページ参照)を開催してくれる共催団体を募集します。

◆対象団体: ESD-Jとの共催で上記期間中に「地域ミーティング」を開催することができる民間団体。

今後も継続してESDに取り組む意思があること。

◆予算: 現地コーディネーター費として50,000円、講師謝金10,000円以内、ESD-Jメンバーが2名参加するための交通費をESD-Jが負担します。

◆応募締切: 2004年8月31日

詳細は、ESD-J事務局までお問い合わせください。



暑い季節到来です。季刊だから当然ですが、毎回めまぐるしく変わる気候に、日本って本当に四季の変化が激しいかなー、とつくづく思います。こないだまで、あんなに寒かったのに。忙しいのか、年をとっただけなのか、季節くらいもう少しゆっくりすすんでくれてもいいのに、とも思います。(伊藤伸介)

特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

URL <http://www.esd-j.org/> e-mail: admin@esd-j.org

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-10-15 ツインズ新宿ビル4F (社) 日本環境教育フォーラム内
TEL: 03-3350-8580 FAX: 03-3350-7818

● 会員募集中: 正会員(10,000円)、準会員(3,000円) 詳しくはHPをご覧ください ●

